

露伴全集

第二十六卷

昭和三十年九月十五日印刷
昭和三十年九月二十日發行

露伴全集第二十六卷

頒價八百五十圓

牧製本

著作權者

幸カチ

田タ

文カキ

編纂

蝸カキ

牛ウシ

會カキ

發行者

東京都千代田區神田一ツ橋二丁目三番地
岩波雄二郎

印刷者

東京都青梅市根ヶ布三八五番地
山田一雄

印刷所

東京都青梅市根ヶ布三八五番地
精興社

發行所

株式會社

岩波書店
東京都千代田區神田一ツ橋二丁目三番地

電話(代表)九段(33)八四八六番
振替口座東京二六二四〇番

目次

三人冗語

明治二十九年三月

一

雲中語

明治二十九年八月

七九

後記

六一九

三人冗語

脱 天子
登 仙坊
鍾 禮舍

笑ふもあれば泣くもあり怒るもあるは、酒といふをかきものを飲んでの上の其人との癖なるべし。ほむるもあれば誘そるもあり、感にたへての涙をこぼしてありがたがるあり、腹を抱へてこれはと笑ひ出すもあり、これでは濟ままい濟まみますまいとむづかしい顔して怒るもあるは、小説といふよいものを讀んでの後の分別なり、人さまざまのおもひ／＼も、つまりは讀んだあまりのわざくれに過ぎねば、何と云はうとも別に仔細のあることならぬ三人冗語はじまり／＼。

斷流

頭取。このところにて合評に取り掛かるは新刊の文藝俱樂部なるが、櫻癡の悪因縁は未完のものなれば跡へまはし、鎧持勘助は早く鶴しづの羽根はねがきに出でたれば省くこととし、先づ花袋の斷流より始むべし。斷流は越後國魚沼郡長山村の豪商なるよしなる杉江眞太郎が娘にて勝といふ美人の一代記なり。

眞太郎妻を喪ひ田舎藝者徳を納れて後添とせしに、此女勝を惡みて東京に出さんとす。勝の遊びにゆく観音寺に春雄といふちごあり、勝と中善かりしゆゑ別を惜み、住持も眞太郎の情なき振舞を笑止がりて諭せども甲斐なし。勝は東京に出で、向島紡績會社の工女となり、技師栗田勉に強奸せられ、千住の貸座敷に賣られ、賊菅野傳平に請け出され、内藤新宿の銘酒屋の女となりぬ。その頃娼妓たりし時受けたる微毒重りて病み臥したるを、好事なる紙屑屋の翁慙みて旅費を與へ故郷に返らしむ。さて観音寺に詣でしに、春雄今は實海と名乗りて住持たるに逢ひぬ。勝病癒えて實海に戀をしかくれど實海應ぜず。繼母又た勝を東京に出し、こたびは吉原に賣らんとす。勝溪流に身を投げて死す。斷流の筋はあらまし此の如し。一代記の事なれば筋を書くにも骨が折れたり。

虫負。筋を書くに骨が折るゝ位ならば作家の骨折はいかばかりぞ。流石に新進作者として取り出したるは當世流行の實際種子、工女、宿場娼妓、銘酒屋の女とまで主人公をなり果てさせたれど、讀者の目を掩ふ程の醜態もなく、微毒の徵候なども描寫極盡せざりしはおとなしき事なり。

理窟。斷流といふ題は腑に落ちず。成程韻書を見ればかういふ熟語があれど、その出典は晉の苻堅の傳に、吾の衆を以て鞭を江に投ぜば其流れを斷つに足りなむ、何の險の恃むに足ることあらむといへるにて、斷崖の下なる溪流にはあらず。何にもせよ命題は安ならず思はる。

むだ口。鞭の代りに主人公が飛び込み候。

小説すき。それは兎に角に一體は變化が多くて、面白いといへば實に面白し。涙香なぞの顰ひそみに倣はぬところは此作者の自負するところであらうが、恐らくは涙香とても此篇の如く變化澤山に描くことはならぬべし。讀むものをして五里霧中に在らしむとは實に此篇の如きものを云ふべきか。作者の技倆の凄じさ、敬服のほかは無し。

悪口。變化はいかにも多し、されどその變化のあまり途方もなきはでかしたる事に非ず。勝が強奸せられし翌日工女仲間の孝に説かれてすぐにえらい勢になり、手管にかけて勉を操縦せんとするはあらぬ變化に非ずや。勝が千住に賣らるゝは善けれど、紡績會社の世話人が證人となりたるのみにて、正當なる判人もなく娼妓の鑑札を受けたるやうに見ゆるも、あらぬ變化に非ずや。娼妓となり銘酒屋の女となりし勝が、いかにまことの戀なればとて實海に對して忽ち極端なるおぼこ娘となるも、あらぬ變化に非ずや。特つとり變化のみに非ず、篇中猶あらぬ事いと多しと覺ゆ。觀音寺の老僧の言動は始終田舎婆めきたり、世にかゝる老僧あらむとも思はれず。春雄は剃髮して猶春雄と稱し、住持となるに至りて方纒ちか實海と名乗りぬ。法號を貰はずして剃髮することも、住職を襲ぐに至りて法號を定むることも、いかなる宗旨か知らねど有るべくは思はれず。勝が汚れたる履歷を個人の罪にあらず社會の罪なりとする評は、作者の插みしにあらずして老僧の口より出でたり、これも釋教にはあるまじき見ならむ。

さし出。おつと八面樓が年寄つて出家したらばさういふ説法をせぬにも限らず。

悪口。有られぬ事の數は未だ盡きず。稱謂の上にては人々觀音寺の前の住職を喚びて老僧様といふこと既に可笑きに、實海のしかいふに至りては甚しからずや。

法律家。それらは咎むるに足らずとするも、年老いては又昔の如く邪慳ならざると記されたるお勝の繼母を、其少し後のところに年老いても少しも昔の心に變らざるなどと記せるは、餘り甚しき矛盾にはあらずや。かゝる事は慥に作者の胸中に篇中の人物の映じ居らざる證と見るべく、反證なき以上は我がこの嚴しき批難を云ひ解くこと叶はざるべし。紙屑買の老人もまた恐らくは作者の胸にすら明らかなには映じ居らざるなるべし。

批評家。又驚くべきは作者が處々自ら評を下して、しかも我黨の平生用ゐる語をその儘用ゐることなり。勝が實海に懸想したるを評して感情の琴線に觸れたりとは、その最目立ちたるものなり。勝が歸郷の事を敘して喧囂の極まる處平和來り、平和の極まる處喧囂來るは天地の一大原則なりと云へるは、支那流の小説評を平凡にしたる如き筆つき、これも亦目立ちたり。

むだ口。すでに作者と評者とを兼ね得たからは、今一足進んで讀者を兼ねては如何。自分で書いて自分で評して自分で買て居れば、これが即ち世に謂ふ出ず入らずにて、此上の無事又となし。

文法家。われは字句の上より少く言ひたきことあり。山寺の石磴をきざはし又きだはしといふ訓はい

かに。きざはしは階ならずや。おとなしを音無し、くちきくを口聞く、みねむりを居寝といふ眞名はいかに。おとなしは大人らしきにて、口きくは口利くなるべし、居ねむりは坐睡ならずや。額をひたへ、羊柄菜をしどき、虚言ウソのつきくらをつきつこらも可笑し。眠りかけたる態をねむつかけも可笑し。そのめぐる日の夜も可笑し。子供遊をたゞちにまゝごとをかし。子供の積みたる石の崩るゝ音を凄き音もをかし。野分にあへる女郎花の聲を揚ぐるもをかし。突當りあるく矢大臣もをかし。眞太郎が娘をいたはる時、箸の上下にまで甘い言葉をかけしもをかし。僧の勝を慰むる時、濟んだことを言ふと鬼が笑ふといふもをかし。成語を殺して使ひたるは、香烟常に數峰の雲をつくるにて遠帆樓を泣なせたる、水がくれし菖蒲の引手多しにて頼政を泣せたる、行く水あらばいなむとぞおもふにて小町を泣せたるなど、猶あるべし。その他作者好みて對句をなせども、おほかたは對句のせんなく徒いたに冗長にわたりて人を倦ましむ。

ひいき。以上の評判にては此篇も見るかげ無きもののやうなれど、左様やうばかりでもあるまじ。勝が故郷に歸り久し振りにて老僧に逢ひたる條くたの末に、勝は此時八年の昔にかへりて春雄と遊びて歸り來れる時の心になり、またも母様に叱らるゝのでは無いかと危まれぬといへるところなどは、大きに趣きありておもしろからずや。文法家等の言は苦くとも良薬なれば澤山服用して健全體となりし上、勇をふるひて續々佳作を出されんことを待つ。

頭取。次は南翠の作なり。畝傍と共に沈みし海軍大尉波多忠澄の妻八重、大阪浮世小路の塚筋にて印紙店を出したるを、今宮に住める詐偽師有賀泰介見そめて、船場御靈筋の骨董商古川久兵衛、北の新地の女髪結竹などをかたらひ欺き娶らむとせしに、泰介が使ひし下女作、波多に雇はれたるより謀破るゝ話なり。

うがち。名高き朧月夜以來、屢しばしば此作者の作を眼にせしが、此作者の癖として例の如く此篇も亦たくみを描けるは口惜し。折角好く熟したる筆によつて寫し出されたる人物も、たくみといへる絲のため操られて動かさるゝ態の見ゆるより、何となく明らかならずして、活きたる人と云はむよりは、非常に巧に作られたる傀儡を見る心地す。料理にて云へば、美味にはあれど洒落を寓したる遊食とかいへる類の饗膳の、如何に巧に獻立なしあればとて少く厭ふべきところあるが如し。たくみだに無くば此篇も同じ作者の優兵士の自然に近くしておもしろかりし如く、作者の老練なる筆は慥に吾等をして敬服せしむべきに、惜むべし。

潔癖家。われは巧と共に除けて欲しきものあり。そはこの作者の小説中にをり／＼見ゆる議論なり。

こゝにては泰介が口を借りての酒害論、八重が住居につきての清福論など頗るうるさき心地す。其他議論ならぬもうるさき筆あり。例之ば佐々木弘綱が著書出版の手續の如し。されど東錦繪の初段の正

月の賦ほどなるもの篇中に出でざりしは幸なり。

さし出。その序に除けて貰ひたい者は、結末にお八重さんの徳を頌した銘に曰くともいひさうな文句なり。

悪口。そのみならず處々に見えたる穿ちの類のうるさく眼ざはりなるも取除けて貰ひたし。何程心きよて眼するどき久兵衛にせよ、根がけが牙彫げぼりの奈良人形なる、下駄の端緒はたごが水色の一樂に裏天なる、赤ちゃんが夏雄の毛彫なることまで見ぬきたりとは、硯の中より出たる通とほにて、久兵衛が口より洩もれたる通にはあるまじくおもはる。

ひいき。さて／＼やかましいこと哉。さう片端から取り除けられては何も残らぬやうにならうも知れず。流石老鍊の筆とて斷流ほど引つ掛るところは固よりなく、櫻癡おうぢなどよりは熱心になりて書かたる邊りもあるべく、おなじ詐偽の筋を較べ見むに、篁村のつり的にも劣れりとは覺えず。役者にて云はば大阪にての右團次の下には決して墮ちぬなるべし。

算術家。篁村と南翠との比例が出ては黙つては居られず。

南翠の作 = (謀計十六製裳十談義) 駄洒落

(活版本十早耳十變通) 宇和島

篁村の作 = (長閑氣十ひざり十談義) 駄洒落

(蠶冊十短見十變通) 龍泉寺

是の如き宿題を出したれば諸君比較して其差を見るべし。

残念

頭取。次は左川の残念なり。静岡在に老僕一人使ひて住める一軒屋あり。その一室人のおとづるゝ度ごとに、或は油繪の額かゝり書棚ある小部屋となり、或は奥行浅き陶器架となる。好事のもの十人ばかり打揃ひてこれを究めに往きしに、家は焚け焔と僕とは焼け死して迹なしといふを筋とす。

潔癖家。この小説にてもわれは不可思議論にて閉口したり。

むだ口。其代り讀んで結末に至つて、あつというて口を開かせられたるなるべし。

ひいき。ひいきと名乗つて出は出たれど我舌は瀬戸物となりぬ。

峰の残月

頭取。さてお侍兼の峯の残月となりたり。美妙と稻舟との第一の合作はこれなり。小太郎といふロメオと照といふジュリエットとの戀を筋とす。小太郎の父格之助は照の父松原明貞の産を奪ひし人なれど、照の花風病の哀なるため、明貞意を曲げて婚を格之助に求む。格之助は丹波家の姫君關子との約已に整ひたりとてすげなく謝絶す。松原を松平とせしところあれど、これはいづれか草書のために誤られたるなるべければ批難なきやう豫め願ふなり。

潔癖家。語勢を氣にしたるためか批點、單圈點、重圈點にて殊更に區別したるはあまりうるさからず

や。

束髪。左様仰せあつても讀みます中に涙が圈點の數ほどそれだけこぼれましたもの、實に面白いものでした。

頭取。別に悪口も無し、むだ口さし出口理屈家文法家乃至算術家等より評も出ねば、此篇の此冊中にて第一の作なることには異論なかるべし。

皆々。異論無し、異論無し。

名曲「クレツエロワ」

頭取。これより新出の國民小説に移るべし。首ははじめ小西氏増太郎と紅葉尾崎氏との合譯トルストイ伯の「クレツエロワ、ソナタ」なり。題はベエトホオフエンが澳大利駐劄佛蘭西公使ベルナドツト將軍の隨行員「キオリン」弾きルウドルフ、クロイチエルがために制せし樂曲の名に取る。ボズヌイセフといふ人モスクワに住めり。大學の法科にて卒業し某縣の貴族會長を勤め居しがペンゼン縣の零落したる豪家の娘を娶りて五人の子を産ませぬ。初の子産れしとき醫の勸すすにて乳母を雇ひしに、妻の姪欲は哺乳を止とどめてより燃え出せり。夫妬みてそれよりの後の子をば妻に育てさせたり。子の多くなりてより夫婦の間面白からねば、餘所よそにまぎることあらばと思ひてモスクワに遷りぬ。その頃醫に避妊法を教へらる。ある日同郷の豪農の子にて巴里の音樂學校に入りしことある「キオリン」弾き尋ね來ぬ。

妻「ピヤノ」を能くするゆゑ此人と「クレツエロワ、ソナタ」を合奏す。三日の後村に議會ありて往きしが、留守の事心に懸れば俄に歸りぬ。妻は果して「キオリン」弾きと密會せり。刀を持ちて入りしに男は逃げたり。乃ち妻の腹を刺して殺しぬ。この顛末をばボズヌイセフ汽車中にて作者に語るやうに書きたり。

眞面目。原作の上にはあらはれたるべき修辭上の美は必ずしも翻譯によつて知るべくもあらねば、此譯によりて此篇の果して佳作なるか否かを云はんは烏滯なるべけれど、此翻譯によりて我が知り得たる「クレツエロワ、ソナタ」は慥に面白からぬものなり。我は此譯によりて人生に對する作者の意見は知ることを得たるも、小説の面白味は感ずることを得ざりしなれば。

文學通。洵に然り。嘗て暗黒の勢力を讀みて、伯は唯、他人の憚りて筆に上さざる事を書きたりと云ふに過ぎざる如く感ぜしことありしが、此篇はいよ／＼はたはたし甚きものなり。

醫學生。譯文は不知庵が罪及罰と伯仲す。原意を傳ふるに差支なしといふ迄なるべし。消毒藥は病原たる細有機體を殺す方 Desinfiens の義に用ひ慣れたれば、これを解毒藥 Antidotum 即ち俗に謂ふ毒消の義に用ひしは妥ならず。喃といふ字杯ことさらに再生せしめたるもその甲斐なく覺ゆ。

花あらそひ

頭取。次は花あらそひといふ一幕ものの滑稽劇なり。令嬢花子が番町の宅を舞臺とす。紳士鯉野彌古

三、小松田門太の二人齊く來て婚を求む。彌古三愛の聲言の演習をなすところへ婢梅入り來りて我身の上とおもひて受け、夫婦約束せし馬丁松造と破談す。松造彌古三を殺さむと嘆ぐ。梅が告にて一座怪むが中に、彌古三これを利用してまことを明し、花子承諾す。門太は媒となる。作者をA B子といふ。

一國者。筆も幼稚なれば結構も幼稚にて、出來損じの麥酒の如く、濁酒にも劣りたる難物なり。特に末のところ、先づ媒妁位が適當なもんだ、はてこまつた戀のやつこといへる如き人名を用ゐたる駄洒落に至つては、鼻を撮むよりほかに此篇に對するの途なし。

洋行がへり。この篇A B子の制作なるか翻案なるか詳ならず。その風俗はいづくの國にもあるまじきものなり。花子は道具立にて見るに、ゆたかなる暮しをなすものと思はるゝに、これを妻にせんといふ彌古三、いやがる新聞屋に投書の原稿を押賣すといふこと訝し。おなじ紳士の門太を欺かむとして、我は此家に盜みに來たるなりといふも訝し。戀の聲言をなすといふも、その時跪くといふも西洋の俗と思はるゝに、彌古三門太が令嬢を訪問し、令嬢の兩手を握るとは西洋にてはあるまじき事なり。(訪問のみは亞米利加風とも見らるべけれど)門太がいづくへなりとも彌古三の代にゆきて求婚せんといふも怪き俗なり。彌古三が門太を媒にせんといふも、自ら求婚し戀の聲言をなす俗とは諧はず。梅が求婚を諾せしことあまたゝびありきといふも怪き俗なり。